特定非営利活動法人
地球緑化センター

第30期

1年間の農山村貢献活動

緑のふるさと協力隊

受入先募集要綱

活動期間 2023年4月6日(木)～2024年3月17日(日)

目 次

1. 緑のふるさと協力隊とは	P.1
2. 協力隊の仕組みと受入先	P.3
3. 活動と暮らし	P.5
4. 1年間の流れ	P.7
5. 活動終了後の進路	P.9
6. 地域とともにある協力隊	P.10
7. 受入れの概要	P.11
8. Q & A	P.13
9. 資料　受入れ実績のある市町村一覧	P.14

主催：特定非営利活動法人 地球緑化センター
後援：内閣府、総務省、文部科学省、農林水産省、全国市長会、全国町村会、全国山村振興連盟、(公財)日本離島センター、日本青年団協議会、NHK、(公社) 国土緑化推進機構、全国水源の里連絡協議会、特定非営利活動法人中山間地域フォーラム(順不同)

1 緑のふるさと協力隊とは

「緑のふるさと協力隊」は、1994年に始まり29年間継続して実施している1年間の農山村貢献プログラムです。農山村の現状や暮らしに関心を持つ若者が一人の住民として暮らしながら、地域のお手伝いに取り組みます。

参加する若者にスキルや経験は求めません。農山村の人々とおおいに関わって暮らしながら、多種多様な活動にひたむきに取り組みます。協力隊が活動と暮らしを通して、人と人とをつなぐ接着剤となり、地域の「内なる力や魅力」を掘り起こす。それが、農山村の活力につながっていきます。

また、活動を終えた隊員の約４割がその地に定住する選択をしています。活動で養われた地域を見る視点や経験から、社会に求められる存在として活躍の幅が広がっています。農山村での暮らしは若者にとって自分を客観的に見つめ、新しい価値観や人生観を得るまたとない機会になっているのです。

ドラマを生む活動の多様性

協力隊は農林畜産業をはじめ観光や福祉、教育など様々な分野の活動を通して地域おこしを手伝います。地域の方と共に汗を流す場を提供していただくことで、隊員は、「地域のために何ができるか」が見えてきます。

一人の若者が1年間でできることは多くありません。しかし、「後継者不足のために消えてしまう神楽を盛り上げたい！」と隊員が仲間を見つけ神楽教室を開いたことで神楽が復活し、今では祭りのメインイベントになったという例も。「行政・住民といった枠を飛び越えた隊員には地域を動かす力がある」と受入先担当者が語るように、協力隊一人ひとりの思いと、地域の人々の思いがつながって、思いがけないドラマがいくつも生まれています。

月５万円の暮らしだからこそ

協力隊は社会貢献活動という位置づけであるため、給料がありません。その代わりに受入先が住居と光熱水費を負担し、隊員には生活費として毎月5万円が支給されます。

必要なものは何でも「買う」都会の生活とは違って、農山村の暮らしは「工夫する」知恵にあふれています。畑で野菜を作ったり、木や竹などの資源を使って技をもつ達人に棚やカゴ作りを教わるなど、隊員にとっては「生きる力」を身につける絶好の機会です。一方、地域の方にとっても地域貢献活動として取り組む懸命な若者の姿は刺激となり、隊員の応援団が増えていきます。

地域社会ならではのつながりが協力隊の暮らしを支え、５万円だからこその心豊かな毎日を過ごすことができます。

地域、役場、隊員が一緒になって歩む1年間

参加する若者は、それぞれ個性や特性を持っています。元気いっぱいですぐに地域の人気者になる隊員もいれば、なかなか前に出られないもののじっくりと活動を深めていく隊員もいます。また、「初めての一人暮らし」「社会に出るのが初めて」という隊員も。

隊員には派遣前の事前研修でルールや心構えなどを伝えていますが、暮らしに馴染むまでに時間がかかり、派遣当初はご苦労をおかけすることがあるかもしれません。「いまひとつ積極的ではない」「昨年の隊員と違う」と少しの期間で判断せず、まずは地域のいろいろな面にふれる活動をさせてください。体を動かし、交流を重ねることで経験値や人間関係も広がり、隊員自身から「地域のために自分が貢献できること・やってみたいこと」が紡ぎ出され、新たな活動へと展開していくでしょう。

1年間というじっくり腰を据えた活動だからできること。それが隊員の「人間力」を高めるきっかけとなり、地域に思いもよらない変化や出来事を引き起こします。

4割が定住、そして「第2のふるさと」へ

協力隊に参加する若者の約4割が活動終了後、農山村に定住するなどし、農林畜産業、行政、観光、福祉、教育、食、地域づくりなど様々な分野で活躍しています。多くの若者がそのまま残るのは、協力隊の1年間が「体験」ではなく、生き方そのものに影響する機会になっているからでしょう。人とのつながりを深めるなかで「どこかに就職する」というよりも「どこでどうやって生きるか」という視点を育み、農山村に自分の生きるフィールドを見出しています。また、定住しなくても派遣先へ通い、一番の応援者・情報発信者として都市と農山村をつなぐ架け橋になっています。

協力隊は1年限りでは終わらない。そこがこの事業の一番の魅力かもしれません。

2 協力隊の仕組みと受入先

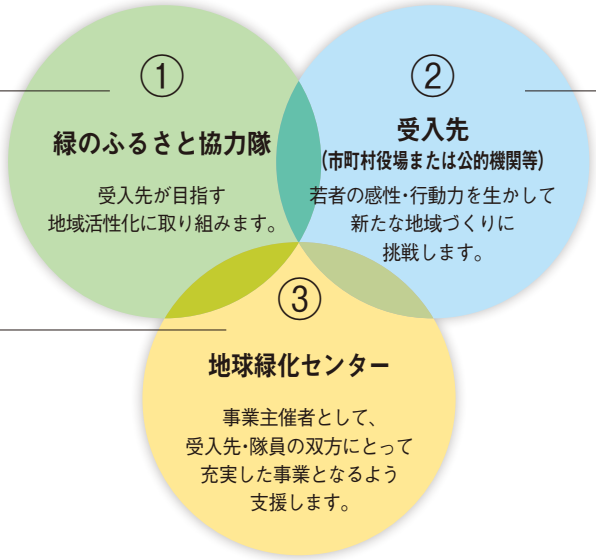
安心して参加できる体制とそれぞれの役割～充実した1年にするため～

【地域貢献活動】
受入先で実施するさまざまな地域活動に、住民と共に取り組みます。

【情報発信】
市町村の魅力・課題を内外へ発信します。

【連絡・調整】
隊員と受入先の連絡調整役として、円滑な現地活動を年間を通してサポートします。

【事業実施主体】
隊員や受入先を募集し、選考や研修を実施するとともに、活動の可能性を高めるために国や自治体、各種団体に協力を呼びかけています。



【活動環境の整備】
地域住民に事業の理解と協力を要請したり、生活費や住居の提供などをします。

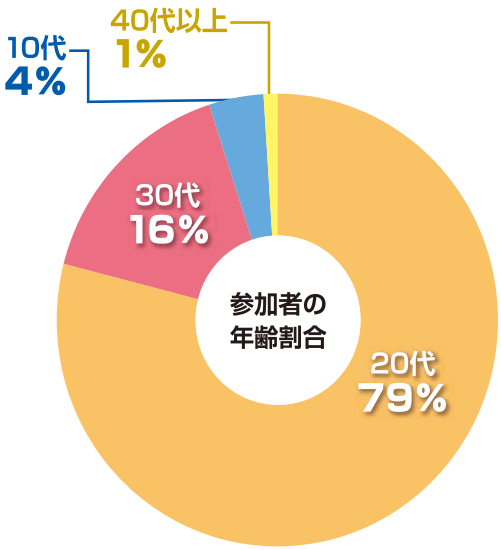
【相談】
活動内容や日常生活の相談を受け、アドバイスをします。

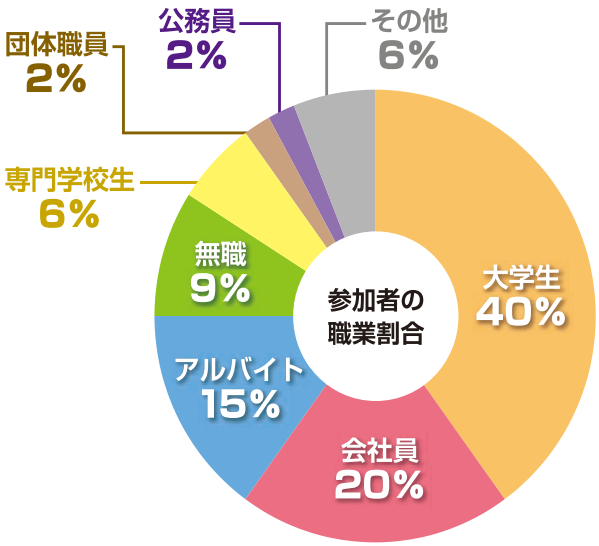
「緑のふるさと協力隊」は、①協力隊となる若者、②若者を受け入れる受入先、③両者を結ぶ地球緑化センターの三者がそれぞれの役割を担い連携することで成り立つ地域貢献プログラムです。

協力隊に参加するのは、学生や会社員、アルバイトなど、専門知識や特別なスキルを持たない普通の若者です。求めるのは農山村への情熱と地域の応援者になろうという思い。1年間という長期にわたる活動のため、やり抜く意志や情熱、地域に溶け込む謙虚さを面接で確認します。そして、研修を通して地域に入るための心構えや協力隊としての姿勢を学んでから派遣されます。

地球緑化センターは、29年間・800名以上の若者の悩み、挑戦をサポートしてきた実績をいかし、電話や訪問、研修を通して1年間サポートできる体制を整えています。状況に応じ受入先と隊員の間に立ち、双方にとって充実した活動にするための調整に力を入れています。

参加者動向　1994年度（第1期）～2022年度（第29期）／828名





2022年度（第29期）緑のふるさと協力隊

①岩手県一関市(花泉地区)

尾畑 翼
東京都・大学生・23

②山形県小国町

中野 沙和華
神奈川県・看護師・25

③群馬県上野村

小山田 光希
東京都・大学生・22

④新潟県粟島浦村

曲渕 時
兵庫県・大学生(休)・23

⑤愛知県豊根村

伊藤 彩子
広島県・会社員・29

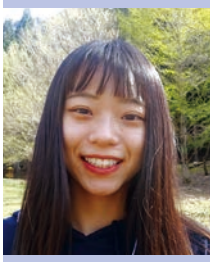
⑥愛知県幸田町

山下 敦史
東京都・会社員・23

⑦石川県白山市(白峰地区)

沼田 かなみ
福岡県・団体職員・31

⑧石川県白山市(白山観光協会)



宮本 まひる
大阪府・大学生(休)・21

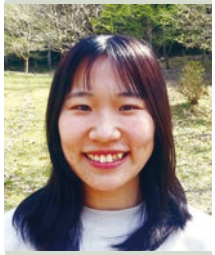
⑨福井県坂井市

水谷 泰志
愛知県・大学生・22

⑩岡山県鏡野町

為国 友梨
東京都・会社員・30

⑪岡山県鏡野町



福井 華奈子
奈良県・公務員・23

⑫宮崎県諸塚村

中嶋 竜太
神奈川県・会社員・26

⑬宮崎県日之影町

菊浦 美宇
神奈川県・会社員・29

⑭沖縄県東村

藤下 征伸
埼玉県・会社員・33

※名前の下は参加前の住所・職業・年齢

◆第29期協力隊データ
派遣人数:14名（男性6名、女性8名）
〈社会人9名、学生5名（うち休学2名）〉
平均年齢:25.7歳
受入先自治体数:12市町村

3 活動と暮らし

農業・林業

農業…野菜・米・花卉・果樹栽培収穫／観光農園手入れ／農協（育苗センター苗運び）／米検査など
林業…森林組合（下草刈り・枝打ち・間伐など）／伐採木の片づけ／炭焼き／登山道・林道整備／竹林整備／木材加工／林産物生産（きのこ類・山菜）／台風被害記録

畜産・漁業

畜産…牛舎清掃整備／牧柵整備／和牛コンテスト／衛生検査／注射／放牧調査／イノブタ飼養／牛のセリ市／養鶏など
漁業…トビウオ漁／マグロ漁／海苔工場／アユ放流／養魚池整備／カキ漁など

食・特産品づくり

農産物加工…大豆加工（豆腐・きな粉）／味噌／ジャム／こんにゃく／山菜など
保存食・伝統食づくり…郷土料理レシピまとめ／五平餅／ちまき／しそ餅／凍み豆腐など
特産品開発…住民アンケート実施／地域の銘菓開発（梨蜜・ポン菓子・桜の花塩漬）

福祉・お年寄り

福祉施設…ふれあいサロン・デイサービス／社協作業所／リハビリセンター／保健センター／健康診断手伝い
自宅訪問…高齢者住宅巡回（聞き取り・配食サービス）／高齢者宅清掃（窓ふき・障子張り）
敬老会…シルバースポーツ大会など

情報発信

ケーブルテレビ取材・番組キャスター／FMラジオ出演／ブログ・SNS更新／ホームページ更新／広報誌連載／自主制作新聞

手しごと

木工細工／竹細工／わら細工／つる細工／正月飾り（しめ縄・門松）／紙すき／桐下駄／染め物など

活動スケジュールの組み立て方

協力隊は特別なスキルを持っているわけではないため、1つのミッションに特化した専門的な活動ではなく、多種多様な場面でのお手伝いが基本です。地域の様々な場面に関わり、加えて青年団、スポーツ・サークル活動、消防団、地域行事などへの参加、地域住民としての暮らしを経験できるような活動が望まれます。

活動の基本は、受入先自身が若者の熱意を活かして地域をどうしていきたいか、ということにあります。活動と暮らしを通して謙虚に学び、自分の生き方を見つけていこうとする若者たちにとって、「地域をこんな風にしたい」という目標を地域の人と共有できることが、やりがいにつながっていくのです。

地域行事・観光・イベント

地域行事…山開き／餅つき／山の神祭り／七夕祭り／民俗芸能祭／夏祭りなど
伝統芸能…祭り／夜神楽／農村歌舞伎／和太鼓／よさこい／阿波踊りなど
観光…道の駅／キャンプ場／国民宿舎／観光案内所／体験施設／物産館／直売所／出張物産販売など
地域おこしイベント…山菜まつり／キャンドルナイト／マラソン大会／花火大会など

教育・子ども

学校行事…読み聞かせ／清掃登山／ALT英語講師補助／プール清掃／運動会／学童保育／音楽会／図書館の本整理／自然学校指導補助／体験学習受入（村内・都市部）
山村留学施設…指導員補助／食事補助／子どもたちのお世話
公民館…公民館・児童館行事／文化祭／資料館・交流館受付対応／スポーツセンター

集落活動

青年団／消防団／婦人会／自治会／子ども会／老人会／寺社清掃／側溝泥上げ／集落見回りなど

生活維持

草刈り／雪かき／冬支度／クリーンアップイベント／獣害対策（鹿よけ網・イノシシ箱わな設置）／薪割りなど

役場事務手伝い

交通量調査／防火訓練／歳末夜間パトロール／転作確認／観光パンフ・マップ作成／水質調査／獣害調査／選挙運営手伝い／台風被害復旧作業など

4 1年間の流れ

起 4～6月

活動を軌道に乗せるため、最初の3カ月は多様な活動プログラム提供を!!

現地活動スタート!

初めての土地で新しい生活のスタートです。早く地域にとけこめるよう、最初の3カ月は切れ目のない様々な活動をご準備ください。そうすることによって、隊員たちは地域の人たちと人間関係を広げ、名前や言葉を覚えられます。また、活動以外の日常生活の中でも地域との接点を増やし、サークルや行事などにも積極的に参加できるよう、まずはコミュニケーションの広がりにご協力ください。

承 7～9月

ギャップや不便さを楽しみながら、活動に広がりを!!

活動本格化!

夢中で過ごした最初の3カ月に比べると、周囲の環境が見えてきて、生活が一段落する頃です。夏を迎え、活動にも慣れてくるとともに、その幅も広がります。自分なりに楽しみも見つけられるようになってくるのもこの頃です。隊員とのコミュニケーションをよくするために、定期的にミーティングを持ち、活動内容や日程、生活などについて指導・助言をお願いします。

転 10～12月

隊員の個性や特技を活かして…

活動の転換期

すっかり地域にとけこみ、自分の個性や目標を地域の特性に合わせて活動に取り組めるようになってきます。同時に、自分にできることは何なのかを考えることも多くなります。活動の面でも、気持ちの面でも、協力隊員としての役割をそれまでよりも強く意識するようになります。地域と隊員の特性を調整しながら、新たな活動に展開できる可能性もあります。

結 1～3月

協力隊を経て新たな進路へ…

活動期間も残りわずか

活動のまとめの時期に入っていきます。地域の中での報告会など、お世話になった方々への感謝の意味を込めて何か残せるような取り組みができたら、隊員自身のまとめにもなり、成果を地域の方々と共有できる機会になります。一方で4月からのことを考える時期でもあります。受入先担当者や当センターは、受入先への定住を含め、活動終了後の進路について相談・アドバイスを行います。

協力隊の年間活動スケジュール

事前研修（4月•6泊7日）

今年度派遣される協力隊全員が集まり、講座やフィールドワークを通して、現地活動に向けての心構えを研修します。同時に派遣される受入先は違えども1年間を共にする心強い同期の仲間との絆を深めます。

活動の開始

事前研修地から直接受入先へ向かいます。到着後、受入先担当者から活動と生活についてオリエンテーションを受けます。挨拶回りなどを経て、早速活動スタート。

受入先訪問

地球緑化センター事務局が、受入先をひとつずつ訪問し、隊員や受入先担当者らと面談をします。

中間研修（9月•2泊3日）

活動や暮らしにもすっかり慣れてきた頃。前半の活動を振り返り、後半に向けて目標を再確認したり、気持ちを新たにする研修です。半年ぶりに同期に会い、刺激を受けることも。中間研修で得たヒントを持ち帰り後半の活動に活かしていきます。

進路相談

任期終了後の進路について、地球緑化センターや受入先が相談にのります。

総括研修•活動報告会（3月•3泊4日）

1年間の活動をまとめる研修です。報告書の作成とともに「活動報告会」を開催し、多くの方に活動の成果を報告します。

4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月

◇報告書の提出（当センターへ提出）

各月ごとに「活動レポート」、研修ごとに「報告書」を作成し提出します。

◇「ふるさと通信」の発行

年2回、隊員が持ち回りで、地域の様子を「ふるさと通信」として発行します。地元の人も気づかなかった地域の魅力や課題などを自分の言葉で伝えています。

先輩の活動

第25期（2018年度）高知県大川村派遣　濵田 栞さんの場合

1年間の流れ

4月
挨拶まわり、芝桜祭り、草木染め、水稲育苗、農作業（ピーマン）
村外から来る方も多く、村の人にとっては若い人も珍しくない印象を受けた。ご年配の方もとても元気！

5月
お茶摘み、野地峰登山、植樹祭、鹿の解体、ソフトボール大会、居酒屋イベント
熱い戦いが繰り広げられるソフトボール大会。色んな方に会えて交流でき、仲が深まった！

6月
道作り、お茶会、田植え、農作業（小麦・梅）、竹細工、牛舎手伝い
村では集落ごとに道の草刈り・手入れをすると知りすごいなあと思った。都会にはない光景だ。道作りの後に、お茶会を開いた。疲れているにもかかわらず、集落の方がお菓子を持ち寄って顔を出してくれた。

7月
竹炭、青年団活動、水源地手入れ、イベント運営（てっぺんラリー）
山の上流から水を引き、村の生活水としている。山へ行きパイプの掃除やタンクの様子を見に行った。自分たちで管理することの苦労を知れた。

8月
村民祭、短期プログラム「若葉のふるさと協力隊」、紅茶作り、バトミントン、俳句会
みんなで作り上げる夏のお祭り。400人の村人と見上げる花火はとてもキレイで心が温かくなった。

9月
農作業（ピーマン・ほうれん草・花卉）、牧草刈り、運動会準備、カラオケ会
周りを見回すと紅葉の風景にぐるりと囲まれていて、ついつい見とれてしまう毎日。

10月
森林組合、剥し子・編み物、大座礼山登山、稲刈り、大川黒牛出店イベント
おばあちゃんに教わり、編み物ができるようになった。後日一人で作ったものを持っていくと、喜んで飾ってくれた。

11月
謝肉祭、農作業（玉ねぎ・小豆）、登山道整備、神祭、産業文化祭、マラソン大会
400人の村に1,500人のお客さんがやってくる謝肉祭！村中が準備に大忙し。仕事もあるなか本当にすごいなあと思う。

12月
かりんとう作り、神社清掃、猪の解体、星空イベント、バレーボール大会
年末年始は一人で静かに過ごすのかなと思いきや、たくさんの方が「ご飯においで」と声をかけてくれた。予想外でとても嬉しかった！

1月
井野川フットパス、木星会、初会、俳句会、喫茶イベント、草刈り
喫茶イベントを自分で企画。70人ほどの人が訪れてくれた。色んな方に助けてもらいながら運営できた、感謝。

2月
謝肉祭たれ作り、お達者会、読み聞かせ、居酒屋イベント、農作業（花卉）
カゴ編みが上手なおじいちゃんに遭遇。もっと早くお会いして教わりたかったなあ！

3月
活動報告会、喫茶イベント、グラウンドゴルフ、お達者会、挨拶まわり
報告会はたくさんの人が足を運んでくださり、笑って聞いてくれた。1年間頑張りきれてよかった！

ある月のスケジュール

1日	休日／村内を散歩 夜は村民の方とBBQ
2日	ふるさと祭りの準備
3日	ふるさと祭りの運営
4日	道の駅のお手伝い
5日	野地峰 登山
6日	休日
7日	お茶の加工
8日	イベント準備
9日	小・中学生とお茶摘み
10日	小・中学生とお茶加工
11日	ジャガイモ畑のお手伝い
12日	おばあちゃんと草木染め
13日	お茶摘みイベントのお手伝い
14日	「若葉のふるさと協力隊」の書類作成
15日	フットパス研修／田んぼ整備
16日	子どもたちに絵本の読み聞かせ
17日	花卉農家　出荷作業のお手伝い
18日	植樹祭イベントの運営
19日	植樹祭イベントの運営
20日	「はちきん地鶏」PRの出店イベント
21日	休日／もらった筍を料理!
22日	産業部会 農家さんの集まりに参加
23日	草木染めのイベント準備
24日	休日
25日	休日／家庭菜園の準備
26日	野地峰 登山
27日	草木染め体験イベント
28日	休日
29日	紙すき・ソフトボール大会
30日	お達者会に参加
31日	草刈り機の講習会・鹿の解体

ある日のスケジュール

6:30	起床	毎朝、窓から外の景色をちらり。雲海が出ていることも！
8:00	自宅出発	車で役場へ向かいます
8:30	役場に顔出し	村の方、担当者の方に挨拶
9:00	絵本読み聞かせ	子どもたちの反応にワクワクドキドキ！
11:00	お達者会参加	おじいちゃんおばあちゃん、近隣の方が集まる会です
12:00	みんなでご飯	みんなで食べるご飯は美味しい！
13:00	お達者会	体操をしたり、ゲームをしたり。元気な方がたくさん！
16:00	イベント打合せ	当日の動きや必要なもの、意見を出し合います
17:15	帰宅	夕日がきれい。今日もがんばったなあ
18:00	夕食・自由時間	自分の畑に水をやったり、頂いたお野菜を料理したり
20:00	ソフトボール大会	スポーツは自然と人との距離も縮まる！楽しい！
22:00	帰宅	満点の星空！レポート忘れないうちに書こう…
23:30	就寝	お布団にダイブ！よく眠れそう

活動終わりに会った人に「今日の夜ご飯食べにきいや！」と声をかけてもらって、お邪魔することもしばしば！晩御飯を作らないで済むことが多かったです（笑）バレーボールやバトミントンなどサークル活動に遊びに行ったりもしました。

住居について

生活費同様、住居についても質素を信条としています。自炊ができ、健康で農山村らしい暮らしができる住環境であれば結構ですが隊員が地域に溶け込みやすく、安心して生活でき充実した活動につながるよう可能なかぎり隣近所と近いところを希望します。なお住居に入浴施設がない場合は、銭湯代の支給もしくはもらい湯等の対応をお願いします。
※住居の例:市町村営住宅・教員住宅・一般住居借り上げ（空き家）等。

保険について

当センターでは、隊員が活動中ケガをしたり、誤って他人のものを壊してしまった場合等、万が一に備え、以下のような保険措置を隊員全員に講じます。事故が生じないように常に隊員各自責任を持って健康管理に取り組みます。

なお、危険を伴う活動を行う場合（例:チェーンソー等動力を使用する、カヌー・ラフティング等海や河川でのスポーツが含まれる活動をする）は、必ず十分な研修を受けさせ、別途保険に加入してください。

(1) ボランティア保険（賠償責任保険・傷害保険）

①適用範囲：活動中に協力隊員が傷害を受けた場合、あるいは第三者の身体・財産に損害を与え、慰謝料・見舞金・賠償金を請求された場合
②補償期間：協力隊活動期間（研修中も含む）
③補償内容：下表の通り（今年度）

A：賠償責任保険

対物事故	1事故につき5億円（限度額）
対人事故	1事故につき5億円（限度額）

B：傷害保険（協力隊員自身の事故）

通院保険金	7,000円／1日（最大90日）
入院保険金	14,000円／1日（最大180日）
死亡・後遺障害金額	2,700,000円
後遺障害保険金	後遺障害の程度に応じて、後遺障害保険金額の100～42%

(2) 普通傷害保険

活動中以外の時間に何か起こった場合にもサポートできるよう、24時間補償タイプの傷害保険に加入します。
①適用範囲:24時間補償タイプ
②補償期間:協力隊活動期間（研修中も含む）

5 活動終了後の進路

農山村での就職

第12期
岐阜県飛騨市派遣
坂井田智宏さん
【観光協会職員・滋賀県在住】
参加時28歳・自営業/アルバイト

滋賀県高島市の旧朽木村派遣の同期と結婚し、ここでの生活が始まりました。(公社)びわ湖高島観光協会のチーフコーディネーターとして「よそもの」の視点から地域の魅力を発信しています。3人の子どもに恵まれ、あたかも自分が派遣された地域かのように暮らしています。隊員時に経験した、地域の様々な人と関わることが、今の仕事にそのまま役に立っています。経験から得た多くのヒントを活かしながら、今を生きています。

第16期
宮崎県日之影町派遣
岡田原史さん
【自営業「旬果工房てらす」・同町在住】
参加時21歳・大学生

協力隊終了後、集落支援員となり、より本格的に地域おこし活動をするようになりました。その中で「日之影の栗やゆずなどの特産品をもっと活用した加工品を作りたい」「日之影の伝統食を保存・普及したい」という思いが強くなっていきました。そこで起業を決意。伝統製法の地こんにゃく、日之影産果実の無添加・手作りジャム・シロップの製造販売をメインに、日之影町の六次産業化を担っていこうと思っています。

第28期
愛知県豊根村派遣
髙山 紗季さん
【地域おこし協力隊・同村在住】
参加時26歳・会社員

協力隊の活動を通じて農業や林業が身近な存在になり、商品になるまでの過程を目の当たりにしました。活動終了後「豊根村に残りたい」「ここで挑戦したい」という思いから、地域おこし協力隊になりました。豊根村の植物を活かした草木染めを取り入れて、服づくりをしています。1着の服が出来上がるまでには様々な人が関わっていますが、誰がどこでどのように作ったかという透明性を示した、土に還る環境に配慮した服を作ることが目標です。

第25期
岩手県一関市派遣
伊藤京子さん
【農事組合法人職員・同市在住】
参加時28歳・会社員

協力隊終了後は、地元に戻ろうと思っていました。しかし活動していくうちに、沢山の人とのつながりも出来たので、何かするなら地元に戻るよりも、ここでチャレンジする方が絶対に楽しいと気持ちが変わりました。これからは一関の野菜を地域外に販売したり、収穫体験など人が来る機会や場所を提供することで、田舎や就農に興味のある若者と農家をつなぐ役をしてみたいです。

都市部での就職

第18期
岩手県遠野市派遣
松永実咲さん
【教員・愛知県在住】
参加時22歳・大学生

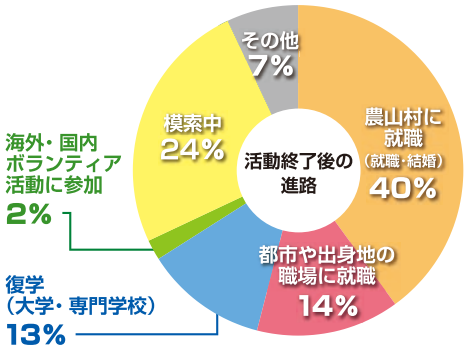
出身地に戻り、農業高校教員をしています。高校時代からの目標であり、協力隊に参加して18年間私を育ててくれた地域を何も知らない自分に気付かされたことから、もう一度足元をみて生活をしたいと思いました。遠野は私にとって第二のふるさと。今は、教員として若者に農業や田舎の魅力を発信することが私にできる遠野への恩返しでもあると考えがんばっています。いつか私の教え子が田舎や農業の分野で活躍してくれることを願って。

第12期
岐阜県清見村
(現高山市) 派遣
金子知也さん
【団体職員・新潟県在住】
参加時25歳・会社員

協力隊での経験をもとに、東京で全国の地域づくりをお手伝いする仕事をしていましたが、その後、もっと現場で仕事をしたいという思いから、家族共々新潟県に居を移し、現在は(公社)中越防災安全推進機構ムラビト・デザインセンターに所属して仕事をしています。協力隊でも学んだように、地域で何をするにしても大前提となるのが、地域の人たちとの関係性づくり。これが農村地域の暮らしの原点だと思います。

活動終了後の進路

活動終了後、約４割の隊員が定住します。進路について多くの隊員が語るのは、活動の経験から「生きる・働く」将来像が具体的になったということ。いくつかの仕事を組み合わせて暮らしを営んだり、地域づくり活動をステップアップさせて独立・起業したりと、新しい働き方、生き方に挑戦しています。また活動終了時は「模索中」でも、数か月後には都市や農山村で進路を見つける人がほとんどです。地域との信頼関係やつながり、経験が自分らしい選択を後押ししてくれます。



1994年度(第1期)～2021年度(第28期)/814名/3月活動終了時調査

農山村への定住者 **約40.0%**

活動終了後、こんな仕事・進路をえらんでいます

農業（百姓、農業法人、農家レストラン）、森林組合、漁業、地域づくりコーディネーター、地域おこし協力隊、集落支援員、手仕事・職人（竹細工、茅葺き、革製品、木工）、大工、行政（県職員、市町村職員、外交官）、観光協会、社会福祉協議会、NPO法人、教職（小学校、高校、大学）、塾講師、研究者、企業、新聞社、出版社、カメラマン、道の駅等観光施設、国立公園管理事務所、介護福祉、障碍者福祉施設、図書館、市議会議員など

6 地域とともにある協力隊

緑のふるさと協力隊に一番大切なことは、地域の方の声を聞き、日々の活動に取り組むことです。

堂々羽ばたく　萩荘・南沢交流会

来月退任・緑のふるさと協力隊　五郎畑智美さん

3月で一関市緑のふるさと協力隊員としての任務を終える五郎畑智美さん（29）は24日、同市萩荘の南沢集落公民館で開かれた交流会に参加し、昨夏から練習を重ねて習得した鶴舞を披露して集まった地元住民を喜ばせた。

関市萩荘の南沢地区住民の前で鶴舞を披露する五郎畑さん

五郎畑さんは広島県福山市出身で、2019年4月から10日から20年3月15日までの期間で同隊員に委嘱、萩荘住んで受け入れ団体の下大桑ヒツジ飼育者の会と共に羊の世話を行いながら、農作業や地域行事などを通じて住民と交流を深めてきた。

郷土芸能にも興味を持ち、鶴舞に挑戦。南沢神楽の指導を受け、昨年10月に開催された一関地方産業まつり農業祭に初で披露した。

五郎畑さんは、交流会のステージ発表に南沢神楽のメンバー3人と一緒に登場。住民約30人は踊っぱいの舞を見せる五郎畑さんをただただ、大きな拍手を送ってきた。

ろはあるが、始めた頃に比べて上達した姿を見せられた。1年間お世話になり感謝している」と話していた。

29日には萩荘市民センターで1年間の活動報告会を行う予定で、席上鶴舞も披露する。

2020年2月25日／岩手日日新聞

2016年10月3日／中日新聞

学生時代は東日本大震災の復興支援として、岩手県久慈市の公民館や海岸にビーチハウスを建てるといったプロジェクトに参加した。「被災地の活力を取り戻す」取り組みに参加するうちに、地域活性化そのものに興味を持った。

大学院を修了後、「緑のふるさと協力隊」として多賀町に移り住んだ。任期は一年間で、農林業や町おこしのサポートが主な活動内容だ。

町は本年度から、協力隊の活動拠点を大杉に移転した。この地区は八月末時点の住民が五十人、十年前と比べて六十八人減少し、人口減少が特に顕著しい。協力隊の活動を通して、集落の活性化に結び付けることが町の狙いだ。

移り住んだ当初は物をいろいろ揃えに参加し、折り鶴やゲームなどを通じて住民と交流を深めていった。八月の盆踊りでは大杉地区に住民が集まり、町の活性化につながることを肌で感じた。

半年が過ぎ、考えも変わり「物がないのでは買い物一つでも、どうしたら必要なものの大切さを考えられるようになった。生活に必要なものの大切さを考えるようになった。

大杉地区では、毎週末に地元住民が集まりサロンを開いている。

「まだまだかなと思うことがあるが、地域に根差した活動をしてくれたことを感謝し、彼の人柄が人々に心から愛されていると感じました。」

【福井県坂井市／受入先担当者】

緑のふるさと協力隊　北島 圭さん（26）

木学び町にも活気

将来の目標は一級建築士。木材を通して建築や林業の基本を学ぼうと、4月から多賀町大杉の古民家で暮らしている。「木のことを知りたくて多賀に来た。自分の学んできたことを生かして、町の活性化にも一役買いたい」（山村俊輔）

末時点の住民が五十人、十年前と比べて六十八人減少し、人口減少が特に顕著しい。協力隊の活動を通して、集落の活性化に結び付けることが町の狙いだ。

移り住んだ当初は物をいろいろ揃えに参加し、折り鶴やゲームなどを通じて住民と交流を深めていった。八月の盆踊りでは大杉地区に住民が集まり、町の活性化につながることを肌で感じた。

半年が過ぎ、考えも変わり「物がないのでは買い物一つでも、どうしたら必要なものの大切さを考えられるようになった。生活に必要なものの大切さを考えるようになった。

大杉地区では、毎週末に地元住民が集まりサロンを開いている。

「まだまだかなと思うことがあるが、地域に根差した活動をしてくれたことを感謝し、彼の人柄が人々に心から愛されていると感じました。」

【福井県大野市／受入先担当者】

協力隊を受け入れてみて

（22期の活動終了後にいただいた感想です）

農作業をしながら会話をする。地方と都会の生活や食べ物の違い等、いくら時間があっても足りない。村に来て幸せ太りとなった隊員によれば、「村の方が贅沢な生活をしていますよ」とのこと。都会の若者との交流から人間としての本当の幸せとは何かを教えていただいた。隊員には農村の良さを都会の人々に沢山発信していただくことを期待している。

【福島県鮫川村／地域住民】

何でも体験し、知ろうとする行動する姿勢を見て、受入先の方々は嬉しく感じていたと思います。鏡野町にある自然や作物の魅力、そして何より人との繋がりを大切にしてくれて、地域の人たちもあらためて鏡野町のことを考えるきっかけになりました。受入先の皆さんは「元気をもらった」「職場が明るくなった」と笑顔で話してくれました。

【岡山県鏡野町／町内CATVリポーター】

山里に生きる手仕事に興味を持ち、わら細工をしている我が家に足繁く通ってもらいました。米作りや藁の確保作業、年末のしめ縄作りまで、一緒に作業をしながら見てきた景色は、日本人がもう一度大切にしたいものではないかと思います。民藝のことについて語り合い、共に作業に没頭した日々。この1年間、良き仲間が傍にいたという感覚です。

【宮崎県日之影町／わら細工職人】

大学を1年間休学した隊員。前任者が地域おこし協力隊として残り、頼れる半面やり難くさもあったかもしれません。しかし、持ち前の旺盛な好奇心で大きな足跡を地区に残してくれました。「ぜひここに戻ってきたい」と笑顔で話している姿を見て、地域に根差した活動をしてくれたことを感謝し、彼の人柄が人々に心から愛されていると感じました。

【福井県坂井市／受入先担当者】

慣れない部分から悩んだこともあったが、それをバネにすすんだ。隊員は特技を生かして地元住民に関わろうと、小学生英語教室を行った。子供たちも楽しそうでいつも笑顔が絶えない。地域内を歩くとどこからか隊員に声がかかり、子供から大人にも認知されるようになった。地域と共に成長し自身の言う『ヘタレ』を克服するには十分な1年間だった。

【福井県大野市／受入先担当者】

活動をしていく中で、町のことを知り、考え、自発的に言葉にしてくれるようになったことは、大きな成長だと感じました。また、「地域の伝統的な営みを継承したい」との思いから始まった炭窯作り。隊員の思いが人を動かし、地元の思いを形にすることができました。たった一人かもしれないけれど、隊員一人の影響力は絶大であると感じました。

【高知県越知町／受入先担当者】

7 受入れの概要――受入れの手順及び条件について

1. 協力隊を受け入れるにあたって

隊員は、受入先の地域活性化のために活動しますが、専門的な技術や知識をもっているわけではありません。受入先市町村には、地域活性化に資する活動プログラムをあらかじめご用意いただき、隊員は必要に応じて助言・指導を受けながら活動を進めていくことになります。しかし、隊員は「お客様」でないので過保護にする必要はありません。反対に隊員に活動を一任するなど「何でもできる」「良い提案をしてくれる」というような過大評価や、「嫁に来てくれる」「定住してくれる」といったような思いこみは、お互いのプレッシャーとなります。また、「地域の役に立ちたい」「地域貢献の中でこれからの生き方を見つけたい」と熱意を持って参加する若者を安易にアルバイトのような「安い労働力」としてとらえてしまうことは、お互いにとって不幸な結果につながります。

2. 受入れまでの手順の流れ

通年	問い合わせ	年間を通して受け付けております。不明な事などは気軽にお問い合わせください。希望に応じて近隣の受入先の視察もコーディネートします。
11月末締め切り	派遣要請書の提出	希望人数及び性別や、年間の活動予定概略等を提出していただきます。
12月～1月	現地調査	新規受入先または継続した受入先でもこれまでの活動拠点から変更する場合は、当センターから職員が伺います。 事業説明と共に、受入れについての詳しい打ち合わせ（具体的な活動先、住居や生活環境の確認）・調整をします。※注
12月～3月迄	受入れの決定・準備	住居や生活備品の準備、活動先や住居を置く集落への周知を進めてください。
2月中旬予定	隊員の決定	隊員から派遣先の希望を聞き、それをもとに書類及び面接選考で面接委員と当センターが総合的に判断して決定します。
2月下旬	合意書の取り交わし	「受入に伴う合意書」を受入先と当センターの間で取り交わし、正式に派遣を決定します。
4月12日着任	隊員の派遣	事前研修（4月6日(木)～4月12日(水)）を終えた隊員が皆さんのところにやってきます。まず、生活及び活動面の全体オリエンテーションをお願いします。（広報誌等を活用し、地域の方々への周知にもご協力ください。）

※注　新規受入れ等による現地調査にかかる費用（旅費交通費等）は、各受入先にてご負担いただきます。

3. 受入先応募の基準

受入先窓口は市町村役場もしくは公社など自治体の公的団体とします。それは、この事業が若者の社会貢献の場であるという目的から、特定の企業や個人のための活動でなく、地域全体のための協力活動が基本になるからです。なお、個別の活動であっても受入先の調整によって公共性を持たせることが可能であれば、個人農家やNPOなども活動対象となります。

4. 経費及び準備について

(1) 受入先の負担

＊「定額」:当センターが指定した金額、「受入先」:受入先が指定した金額及び条件

項　目	区分	年　額	詳　　細
法人会員費	定額	50,000円	受入先の自治体（もしくは団体）は、当センターの法人会員としてご入会いただきます。
隊員の生活費	定額	600,000円 隊員1人あたり	月額50,000円（食費・保健衛生費等）毎月末、当センターから隊員へ送金します。
派遣事務費	定額	720,000円 隊員1人あたり	派遣費・調整費・募集広報費 等
研修費	定額	35,000円 隊員1人あたり	中間研修・総括研修の参加費（宿泊・食事代等）
[活動報告会] 協力負担金	定額	30,000円	総括研修の一環として開催する「活動報告会」のプログラム運営協力金です。隊員が受入先ごとにブースをつくり、1年間で感じたこと、市町村の魅力・物産紹介、農山村の現状などを発信する場です。（隊員3名以上の受入先は60,000円）
[受入先担当者会議] 負担金及び旅費		負担金10,000円 （旅費は実費）	当センター及び受入先同士の情報交換とともに、事業の理解を深める会議です。東京にて、5月～6月頃開催予定です。詳細は事前にご案内します。
[ブロック交流会] 参加費及び旅費		参加費10,000円 （旅費は実費）	受入先近隣市町村の隊員及び担当者同士が集まり情報交換を行ないます。10～11月頃開催予定です。参加費は1名10,000円程度（旅費は受入先負担）。詳細は事前にご案内します。
住居及び居住費	受入先		賃料、水道光熱費　※詳細は下記をご確認ください。
生活備品費	受入先		生活に最低限必要な備品の準備　※詳細は下記をご確認ください。
移動費	受入先		活動に必要な移動手段の確保。移動用として必ず車をご用意ください（ガソリン代含む）。それに伴い、自賠責保険・任意保険（免責なし）にも必ずご加入ください。
活動費	受入先		活動に必要な資機材費等 作業着・長靴等は、中古品でかまいませんのでご用意頂けると助かります。
研修交通費	受入先		事前研修地から受入先自治体までの交通費、中間研修参加のための往復交通費、受入先から総括研修地までの交通費。
活動報告会 出席のための費用			東京にて3月中旬頃開催予定です。受入先の皆様万事お繰り合わせ上、ぜひご参加ください。（参加費無料、旅費は受入先負担）
その他			受入先と当センターが必要と認めた経費。レポート・ふるさと通信等の通信費、コピー代等。チェーンソー等、動力を活動で使用する場合の保険費等（詳細はP8）
受入先現地調査費			新規受け入れ、または継続して受け入れる受入先で活動拠点となる地域が変わる場合 当センター職員による現地調査実施に関わる費用。（東京～受入先の往復交通費、調査費等）

◎地球緑化センターへの納入額合計: 1,435,000円（年額・隊員1名の場合）※定額のみ。その他については実施毎にご請求いたします。
◎事業に係る総額（地球緑化センターへの納入額、住居費、移動手段の確保、旅費等すべて含む）
：概ね200万円前後の予算が想定されます。受入先でご準備いただく住居や生活備品の確保の仕方、旅費等で上下します。

(2) 補足説明

〈経費納入の方法〉
区分が「定額」の経費については、請求書をお送りしますので、それに応じて当センターまでご入金ください。なお、隊員生活費については、事前にまとめて納入していただいた分を、当センターから隊員へ毎月末日、送金します。

〈基本的な生活備品〉
生活に最低限必要な備品をご用意ください。（使えるものであれば中古品で十分です）
寝具・炊事用具（食器含む）・冷蔵庫・洗濯機・冷暖房器具は必ずご用意ください。隊員が、着替え等自分の身の回りのものだけ持参してすぐに活動にとりかかれる体制にご協力ください。
※宿舎にテレビがある場合、NHK受信料については、受入先負担。

〈準備していただく自動車について〉
町村内の買い物程度であれば可能な範囲で活動外使用をご検討くださいますよう、お願いいたします。

〈会議・交流会の参加について〉
担当者は、受入先担当者会議、ブロック交流会に必ずご参加いただきますようお願いいたします。

〈その他〉
①緊急連絡先について
隊員には、当センターの担当職員の携帯電話番号を知らせてあります。事故等緊急の時の場合には、受入先担当者と連携して対応します。

②町内会費、自治会費、寄付行為等について
地域によっては、隊員に対して自治会費納入等を依頼されることがあるかもしれません。その場合、隊員は社会貢献活動に来ていることをご理解いただき、免除いただきますようお願いいたします。

5. その他

(1) 地球緑化センターの役割

①広報・募集
●説明会（全国主要都市）の開催　●募集要綱、ポスター・チラシの作成および配布、掲示
●ホームページおよびSNS等による情報発信
②隊員選考
●書類選考　●面接選考
③相談業務
●年間サポート　●現地訪問　●電話等による相談対応
④研修・会議等の企画、運営
●隊員研修（事前、中間、総括）　●受入先担当者会議　●ブロック交流会
⑤受入れ体制支援
●現地調査、打合せ等
⑥保険措置（普通傷害保険・ボランティア保険）、事故対応
⑦連携・協力
●行政機関、専門家、大学等との協力体制づくり
●協力隊OBOGや受入先のネットワークの活用

(2) 協力隊員の負担

◎このプログラムに参加するための参加費
◎活動先に私物を送る際の運送費
◎健康保険料・年金保険料
◎自宅から研修地までの往復交通費
◎自己都合による一時帰省の費用
◎その他、個人事由による費用

8 Q&A

Q1 担当者の具体的な役割は何ですか？

A1 担当者は、隊員の活動を計画し、調整していただくのが大きな役割です。それに伴い、打ち合わせなどを通して隊員の様子を見守り、必要に応じて活動面・生活面へのアドバイスをお願いします。また、可能な限り、担当課や受入先全体で協力隊の活動について共有いただき、担当職員の方が異動された場合にもスムーズに引き継いでいただけるようご協力をお願いします。

Q2 活動先から、隊員に現金で御礼を渡してもいいですか？

A2 がんばっている若者を見て、特に農家の方などはぜひお礼をしたいとおっしゃる場合が多いようです。そのようなときは、社会貢献活動という事業の主旨を先方へご説明いただき、現金のやり取りが生じないように、ご理解を得てください。しかしせっかくのご厚意ですので、食事や食材など、現金ではない形でのお心遣いをいただくことは隊員の喜びにもつながります。

Q3 協力隊の活動は保険でどこまで補償されますか？

A3 年間を通して、隊員本人のケガや第三者に損害を与えてしまった場合などに保険措置を講じています（詳細Ｐ８）。ただし、チェーンソーなどの動力を使用したケガ（草刈機をのぞく）などは、ボランティア保険では対応できません。使用する場合は必ず事前に講習を受けさせていただくと同時に、受入先にて別途、保険加入が必要です。

Q4 休日はどのように設ければよいですか？

A4 協力隊の休日は受入先の規定に準じます。ただし、土日のイベントや農繁期の早朝の手伝いなどの場合は、状況に応じて代休や活動時間を調整していただくようお願いいたします。また、協力隊の主な目的は受入先での地域おこし活動になるので、休日とはいえ必要以上に近隣の都市部にでかけることはふさわしくありません。

Q5 活動を進めていくなかで困ったときはどうすればいいですか？

A5 トラブルが生じたり、問題が起こったりした場合には、必要に応じて当センターが間に立ってコーディネートします。受入先・隊員双方にとってより良い活動になるよう、できる限りの対応をしています。

Q6 他の外部人材活用事業には無い、特徴・魅力は何ですか？

A6 この事業の大きな特徴は①地球緑化センターによる年間を通したサポート、②活動の多様性、③隊員は無償で活動し月５万円の生活費で自炊生活をするというところにあります。
隊員は専門知識やスキルを持っていませんが、当センターが着任前の事前研修を初めとする年３回の研修で活動に向けての心構えを伝え意思をしっかり確認し、充実した1年にするためのサポートを行います。
また、多種多様な手伝いに謙虚な姿勢で取り組む隊員の一所懸命な姿を見て、地域も活気づいていきます。外から来た若者による一方的な働きかけでなく、若者が地域と共に汗を流すというこの地域密着の日々が、任期終了後の約４割の定住を後押ししているのかもしれません。

Q7 受け入れてみたいと思いますが、予算確保がむずかしいです。

A7 受入先の中には、自主財源だけでなく特別交付税を活用するなど、それぞれの受入先の事情に合わせ工夫して予算を確保しているところが多数あります。それらの事例を紹介したり、提案したりすることも可能ですので、ぜひ気軽にご相談ください。

9 資料　受入れ実績のある市町村一覧

1994年度（第1期）～2022年度（第29期）

【受入先自治体数 107 市町村】

★印は2022年度の受入れ自治体

北海道（6カ所）
伊達市（旧大滝村）
下川町
鹿追町
足寄町
新十津川町
ニセコ町

青森県（1カ所）
西目屋村

岩手県（5カ所）
岩泉町
遠野市（旧宮守村）
西和賀町（旧湯田町）
住田町
一関市★

秋田県（1カ所）
八峰町（旧峰浜村）

山形県（9カ所）
戸沢村
尾花沢市
小国町★
西川町
大江町
飯豊町
舟形町
酒田市（飛島）
朝日町

新潟県（1カ所）
粟島浦村★

福島県（10カ所）
塙町
飯舘村
田村市（旧滝根町）
川俣町
金山町
天栄村
鮫川村
古殿町
南会津町（旧伊南村）
南会津町（旧舘岩村）

茨城県（2カ所）
常陸太田市（旧里美村）
常陸大宮市（旧山方町）

群馬県（6カ所）
上野村★
神流町
南牧村
中之条町（旧六合村）
高山村
東吾妻町

埼玉県（1カ所）
秩父市（旧大滝村）

富山県（1カ所）
高岡市

石川県（1カ所）
白山市（旧白峰村）★

福井県（6カ所）
池田町
あわら市
大野市
坂井市★
高浜町
美浜町

山梨県（1カ所）
南アルプス市
（旧芦安村）

長野県（7カ所）
王滝村
小海町
北相木村
栄村
阿智村
泰阜村
麻績村

岐阜県（3カ所）
飛騨市（旧河合村）
高山市（旧清見村）
白川町

静岡県（3カ所）
伊豆市（旧中伊豆町）
川根本町
浜松市

愛知県（6カ所）
豊田市（旧下山村）
豊田市（旧足助町）
豊田市（旧稲武町）
豊根村（旧富山村）
豊根村★
幸田町★

滋賀県（3カ所）
高島市（旧朽木村）
多賀町
甲賀市（旧土山町）

京都府（2カ所）
京丹後市（旧弥栄町）
綾部市

兵庫県（1カ所）
多可町(旧八千代町)

和歌山県（1カ所）
かつらぎ町

鳥取県（2カ所）
琴浦町（旧東伯町）
日南町

島根県（1カ所）
雲南市（旧掛合町）

岡山県（4カ所）
新見市（旧大佐町）
西粟倉村
矢掛町
鏡野町（旧奥津町）★

広島県（3カ所）
三原市（旧大和町）
三次市（旧作木村）
北広島町（旧芸北町）

山口県（3カ所）
下関市（旧豊田町）
岩国市
山口市

徳島県（2カ所）
上勝町
佐那河内村

香川県（1カ所）
綾川町（旧綾上町）

高知県（3カ所）
佐川町
大川村
越知町

福岡県（2カ所）
八女市（旧星野村）
築上町（旧椎田町）

熊本県（2カ所）
五木村
多良木町

大分県（2カ所）
豊後大野市（旧大野町）
日田市

宮崎県（2カ所）
日之影町★
諸塚村★

鹿児島県（1カ所）
肝付町

沖縄県（2カ所）
東村★
粟国村

地球緑化センターとは

地球緑化センターは、「緑、人を育む」をテーマに、社会の在り方や人の生き方を見つめてきました。環境問題、農山村の過疎化などの社会の課題に対し、市民ひとりひとりが自ら考え行動できるよう、多彩なボランティアプログラムの企画・提供、情報発信をしています。

若者の長期農山村貢献活動
「緑のふるさと協力隊」

児童・生徒への環境教育活動
「緑の学校」

緑、人を育む

地球緑化センター
Green Earth Center

国内森林ボランティア
「山と緑の協力隊」

中国での植林活動
「緑の親善大使」

多彩なニーズに応えます

1.企業・組合の社会貢献活動・研修などのコーディネート
2.大学のゼミやサークルなどグループ活動の支援
3.体験学習のプログラム提供・講師派遣
4.自治体、行政、他団体との連携など

情報を発信します

1.機関誌
「タマリスク」の発行
2.出版物の作成、貸出、頒布
3.ホームページ等による
情報提供

地球緑化センターの歩み

1993年 ―― 団体発足。中国内モンゴルでの砂漠緑化事業がスタート
1994年 ―― 緑のふるさと協力隊事業スタート。国内で初めて市町村自治体と連携を図った長期ボランティア活動を実施
1996年 ―― 森林ボランティア「山と緑の協力隊」スタート（第１回は長野県赤沢自然休養林）。民間団体として初めて国有林で活動
1999年 ―― 特定非営利活動法人格を取得
2000年 ―― 朝日新聞社主催「第１回明日への環境賞 森林文化特別賞」受賞
2005年 ―― 愛知万博「地球市民村」パビリオン出展
2006年 ―― オーライ！ニッポン会議主催「第３回オーライ！ニッポン大賞」受賞
2007年 ―― 緑のふるさと協力隊短期体験プログラム（若葉のふるさと協力隊）スタート
2008年 ―― 日中環境緑化交流センター（中国河北省豊寧県）開所
2009年 ―― 「田舎で働き隊！」事業（農林水産省）の事業実施主体に選定される
2010年 ―― 『農山村再生・若者白書2010』（農文協）刊行
2015年 ―― 森林ボランティア「山と緑の協力隊」第200回記念プログラムを開催（長野県赤沢自然休養林）
2018年 ―― 設立25周年

緑で未来を育む活動を支えてください！

会員募集

1993年に設立された地球緑化センターは、会員の皆様一人ひとりの思いを大切にし、緑と人、人と人をつなぐ活動を続け、今年で29年目を迎えます。
GECの運営は、会員の皆様からの会費やご寄付、様々なご支援により支えられています。趣旨に賛同し、団体を応援してくださる方のご入会をお待ちしています。

入会金	（入会時のみ）	1,000円		
年会費	個人会員	10,000円	学生会員	5,000円
	家族会員	15,000円	賛助会員	20,000円
	法人会員	50,000円		

◇入会方法

入会希望の方は事務局までメールまたは電話でご連絡のうえ、以下の口座へご送金ください。
▶郵便振替　00130-2-761479
▶三菱UFJ銀行　八重洲通支店（普）1011076

◇会員の特典

▶機関誌「タマリスク」無料送付
▶地球緑化センター主催プログラムに優先参加または参加費の割引があります。

■クレジットカード寄付の受付を開始しました

「Syncable」の寄付システムを利用し、
クレジットカードでもご寄付いただけます。
https://syncable.biz/associate/gec/

公式ホームページ・SNSで最新情報紹介中！

http://www.n-gec.org/
QRコードからもアクセスできます

特定非営利活動法人
地球緑化センター
Green Earth Center

〒104-0028 東京都中央区八重洲2-7-4 清水ビル3F
TEL.03-3241-6450　FAX.03-3241-7629
(2022年7月25日から) 〒104-0032 東京都中央区八丁堀4-11-3 金谷ビル2階201
TEL.03-5542-0132　FAX.03-5542-0136　http://www.n-gec.org

YouTube　note　緑のふるさと協力隊　検索